







語でみると初級者層(A1)がACTFL・OPIcの分解能に比べ荒い(逆に言うとOPIcのNM未満は共通会話ができるレベルに至っていない対象者とも云える)ので、文部科学省の原データにある採点結果を0点も含め均等に配分したのが<sup>5</sup>高校3年細分化の意味であり、これを関東国際高等学校校との比較対象とすることが適切と考える。

尚、ACTFLとCEFRとの対応は先行研究による Cross Walk レポート<sup>6</sup>に従ったものである。関東国際高等学校の対象者が17名と少数なので有意な結果を論じるにはほど遠いものの、方向性として下記の仮説を提示するレベルの裏付けにはなつたと考える。

高校生に求められる到達レベル<sup>7</sup>としては国公立3年生同様10%程度であったが、その下位層においてはCEFR・A1層(ACTFL・NHレベル)が50%強、そして予備軍(ACTFL・NMレベル)が30%強で、0点を含むいわばスピーキング困難群(ACTFL・NLレベル)は皆無であった。学術的には要素Ⅱが要素Ⅰに好影響を及ぼしたと断じることは出来無いものの、その可能性をスキル面で裏付けるものになったと考える。

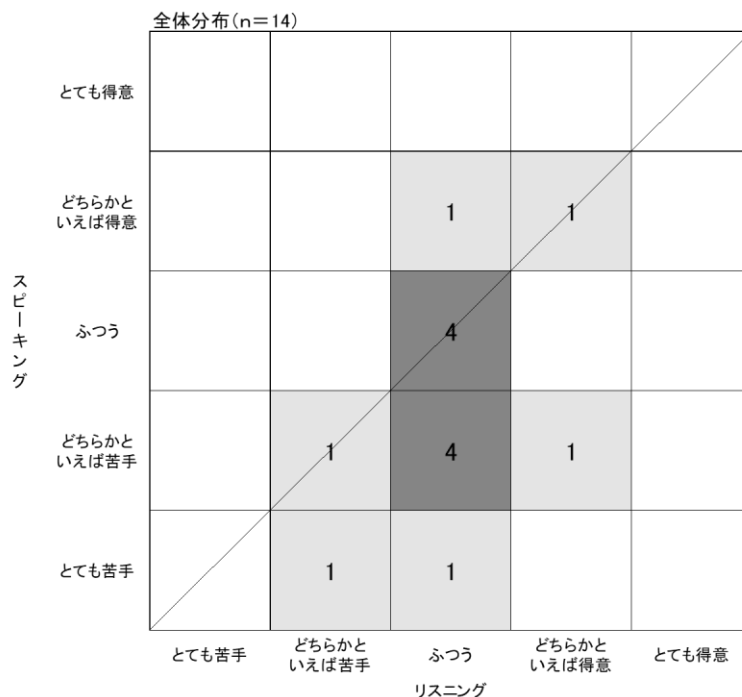
#### 「自己認識、自己肯定感が強い」

学校でOPIcテストを実施する際にはテストの特性を配慮して、質問の把握能力(リスニング)と実際のテストで測られるスキルに対する自己認識(スピーキング)の相関関係を自己申告して取り組んでもらっている(グラフ2)。

<sup>5</sup> 得点0から3をNLレベル、4から6をNMレベル、7から9をNHレベルに配分した。

<sup>6</sup> Tschirner, E., & Baerenfaenger, O. (2012)を参照。

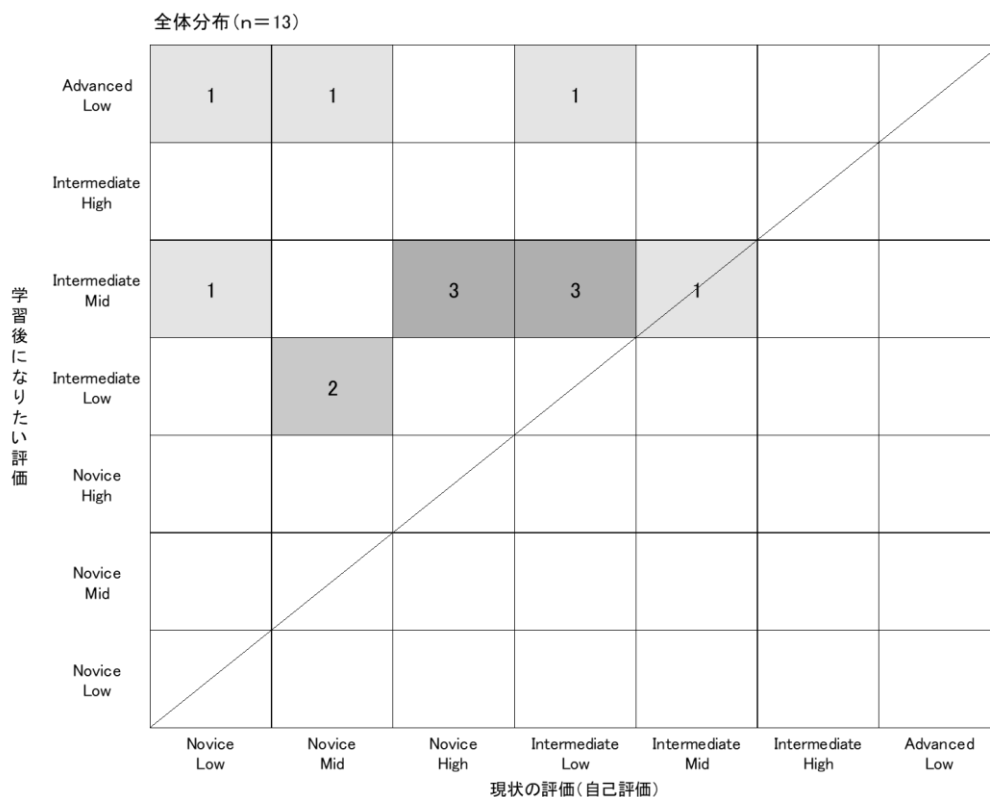
<sup>7</sup> ACTFLは、L2の基準としてILレベル以上をガイド設定している。



グラフ 2 : リスニング / スピーキングの得意・不得意の自己認識 (有効回答数 : 14)

対象数が少ないので感覚論でしか論じられないが関東国際高等学校のアンケート結果は、他校に比して1段階は自己肯定感が強く、かつリスニングとスピーキングのバランスにも大きな乖離がないのが特徴である。

とはいえ、現状の英語のスピーキングスキルに対しては謙虚な日本人の特徴かスピーキングテストの経験不足か、通常のアンケート結果と同様に自身の評価を控え目に見ている。当面の目標設定を高く置く群(AL)は一般的に見られる傾向であるが、必要最低限かつ到達可能な範囲に置く群(IM)の存在は2言語習得の効用(言語習得の意義の客観視)と考えられないであろうか?(グラフ3を参照)

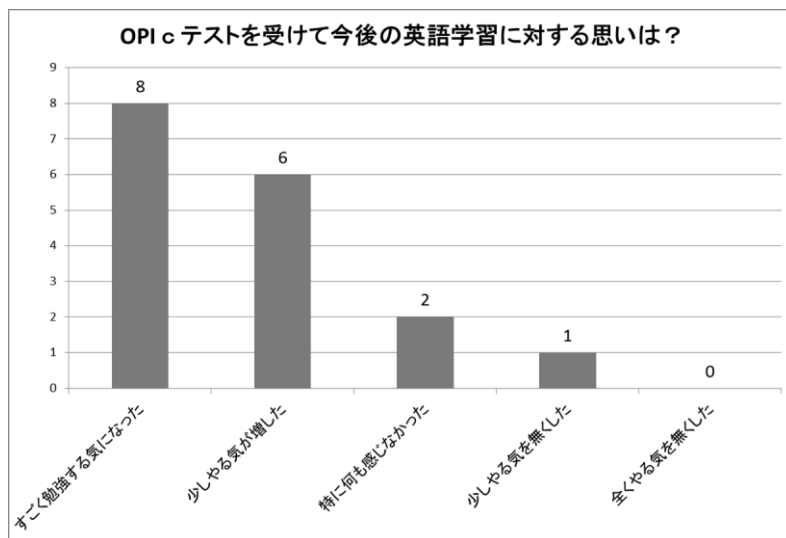


グラフ 3 : 現状の自己評価とになりたい評価 (有効回答数 : 13)

この2つの事前アンケートから読み取れるのは、外国語として英語のみを研鑽している学生と異なり、言語をコミュニケーションのツールとして比較的冷静に捉えている。即ちコミュニケーションのために自身のスキル(要素Ⅰ)に抑制されることなく、要素Ⅱが伴っていれば前向きに取り組む姿勢が伺える。

#### 「今後の取り組み姿勢の変容」

テスト後のアンケート結果のみからの推測であるが、スピーキングテストの評価にポジティブな反応を示す点からも、グローバル環境で色々な言葉が選択肢としてあるのを認めながらも、英語に対しても肯定的に受け止めるバランス感覚が垣間見える(グラフ4)。



グラフ 4 : 受験後アンケート (有効回答数 : 17)

これは文部科学省の同調査で、英語が好き13.3%・どちらかという好き28.3%の合計42%弱と比べても大きな違いを示している。単一言語(英語)を長年受験目的で履修してきて嫌悪・苦手科目としているNLやNMレベル層(CEFR評価対象外の層)に対するリメディアル教育や学習に対する取り組み姿勢の変容促進に、近隣語学習や話し言葉(スピーキング)の通じる喜び体験が関与する可能性については一考の余地があると考ええる。

## 5. 結び

残念ながらアジアの諸国が日本語をはじめとした第二外国語を積極的に学習しているのに比べて、日本の高校で英語以外の学習に費やす時間・努力は乏しいと認識している。その中でも尽力されている高校はあるものの、接点が乏しいこともあり現状では17人のデータしか持ち合わせない。ただ、その延長線にある大学・企業での実績・状況を鑑みると一考の余地や、更なる現状把握は有意義と考える。

典型的な事実が、昨今英語4技能教育・評価といいながら、それを学ぶCALL教室やPC付帯のヘッドセット(スピーキング実践)環境を持つ学校比率が非常に低いということである。

一方、第二外国語実施校は、環境ハンディをICT等で上手く補っている学校も多く、

先ずはそのICT活用の幅を広げる意味も含めて上記のような活動の継続・展開を弊社として支援していく必要があると考えている。

ちなみにACTFL・OPIcは日本では未サービスながら英語以外の10言語を既に評価対象言語としてサポートしており、アメリカでの移民受入評価や教育に有効活用されている。

さらに、上位スキル評価に際しては、日本においても国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(通称JAXA)で英語・ロシア語評価を毎年継続的に実施している。筆者はその立ち合い官を務めた経験を踏まえて日本人の能力の高さにあらためて驚くとともに、その求められるフィールドは無限(宇宙)であることを実感した。

(NECマネジメントパートナー株式会社)

## 参考文献

- 大久保雅司(2014)「OPIc を活用した英語コミュニケーションスキルの評価とスキルアップ研修の効果」CIEC PC カンファレンス2014(札幌学院大学), 口頭発表資料, 2014.8.
- 小張敬之(2015)「英語教育におけるデジタル教材の有効活用と反転教育の効果」LET第55回全国研究大会(千里ライフサイエンスセンター), 口頭発表資料, 2015.8
- 木見田康治・根本裕太郎・石井隆稔・下村芳樹(2014)「価値共創を実現する教育サービス設計のための学習者分析手法」『2014 年度精密工学会秋季大会学術講演会講演論文集』, 641-642 頁.
- 木見田康治・武藤恵太・溝口哲史・根本裕太郎・石井隆稔・下村芳樹(2015a)「教育サービスにおける共創価値の向上のための学習状態モデル」『2015 年度精密工学会春季大会学術講演会講演論文集』(CD-ROM 版).
- 木見田康治・武藤恵太・溝口哲史・根本裕太郎・石井隆稔・下村芳樹(2015b)「共創的に学習成果を達成するための教育サービス方法論」『2015 年度サービス学会第3回国内大会講演論文集』(CD-ROM 版).
- 文部科学省(2015)『平成26年度 英語教育改善のための英語力調査事業報告』.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm)
- 森本太郎・大久保雅司・櫻井良樹・八木智裕・佐藤純子(2014)「OPIc による評価に基づく個別指導の有効性検討」JACET 第53回国際大会(広島市立大学), 口頭発表資料, 2014.8.
- 八木智裕(2015a)「時間、空間を繋ぐ教育・研修事例の実践報告と、その効果の可視化の一手法としての英語スピーキング能力の位置付け」KU-COIL ワークショップ&シンポジウム(関西大学)トークセッション, 口頭発表資料, 2015.12.5.



『複言語・多言語教育研究』日本外国語教育推進機構会誌 No.3 (2015) pp. 82-90

八木智裕 (2015b) 「産学連携によるグローバルインターンシップ実践報告: 留学準備支援と海外現法訪問の意義」JAGCE 第3回全国大会(明治大学)実践報告, 口頭発表資料, 2015.11.14.

Tschirner, E., & Baerenfaenger, O. (2012). Bridging frameworks for assessment and learning: The ACTFL Guidelines and the CEFR. Paper presented at the 34th Language Testing Research Colloquium (LTRC), Princeton, NJ, 3-5 Apr 2012.

## Effectiveness and potential of multi-language learning

Tomohiro YAGI

Most Japanese who have been educated English by Listening/Reading(Input) for examinations are passive not only in business situation but also in conversation for fun at overseas. I put the hypothesis that senior high school students who learn neighboring countries' language from their interests to communicate at overseas and with inbounds situation have possibility to break through this situation. The hypothesis was verified with using English speaking test 'OPIc' based on ACTFL.